

がくもん

# 学問のすすめ 福沢諭吉

ふくざわゆきち



「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人みな同じ位にして、生まれながら貴賤上下の差別なく、万物の靈たる身（こころ）と心との働きをもつて天地の間にあるよろずの物を資り、もつて衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずしておのおの安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。されども今、広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるはなんぞや。その次第はなほだ明らかなり。『実語教』に「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」とあり。されば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるによりてできるものなり。また世の中にむずかしき仕事もあり、やすき仕事もあり。そのむずかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分軽き人という。



## (中略)

身分重くして貴ければおのずからその家も富んで、下々の者より見れば及ぶべからざるようなれども、その本を尋ねればただその人に学問の力あるとなきとによりてその相違もできたるのみにて、天より定めたる約束にあらず。

青空文庫を元としています

参考 … ウィキペディア

福沢諭吉（ふくざわゆきち）一八七二年から一八七六年まで、分冊の形で刊行された、日本国民に向けた近代思想の啓蒙書。当時としてはベストセラーとなり、福沢自身が言うところによれば、国民百六十名のうち一名は読んだ勘定となる。

刊行当時、日本の識字率は地域によって大変ばらつきがあるが（20%〜60%）、江戸時代からの手習い所への通所などで、近代的な学校制度のない国としては、ある程度の識字能力があったと考えられる。

筆者、福沢諭吉、一八三五年（天保五年）〜一九〇一年（明治三十四年）。大阪にあった大分の中津藩蔵屋敷で生まれる。若いころから、儒学をまなぶも、合理的実利的な学風強く、後に「門閥制度は親の敵（かたき）で御座る」とさえ述べている。蘭学も修め、緒方洪庵の適塾の塾頭を務めたり、佐久間象山から教えを受ける。その後、咸臨丸でアメリカに上陸。欧米の新しい思想の息吹を吸い込み、広めた。また、維新後は、主に在野の人材育成や教育界で活躍し、慶応義塾大学を設立した。「学問のすすめ」は、学問についてというよりも、近代市民社会と国家建設の思想をわかりやすくのべ、学問の必要性を説いた。また、合理的な思考の例を挙げるなど、内容は多岐にわたり、比喻や分かりやすい言い回しを駆使して表現している。

引用文の冒頭部は有名であるが、これは福沢自身の言葉ではなく、アメリカの独立宣言から採ったと言われている。この言葉に続いて、福沢は、学問の有無によって、あたかも人間には上下関係があるかのごとく書いている。その部分に驚かれた人もいるかも知れない。しかし、この一篇に続く、二篇でも「人と人との釣合いを問えばこれを同等と言うにあらざるを得ず、ただしその同等とは有様の等しきを言うにあらざり、権利通義の等しきを言うなり。その有様を論ずるときは、貧富強弱、痴愚の差あることはなほだしく、…」とあるように、権利としての平等を考えていたようである。

自由の尊重と自立の必要性を説き、「一身独立して一國独立」を唱え、国家そのものが国際的にも自立すべきだとした。これは、いわば近代社会の基礎となる考えである。しかし、人間は生まれながらに貴賤の別があり、身分があると考える社会思想も世界中に存在したし、自由は広く制限されるべきとする考えは今も存在する。「学問のすすめ」の内容は、今でも古びていない。